

令和3年8月30日

皆さま

目指せ！投票率75%プロジェクト  
実行委員会

## 訂正と、今後「シルバーポリティクス」「シルバー民主主義」を使わない理由

「目指せ！投票率75%プロジェクト」実行委員会です。先日、当プロジェクトの活動方針について記者会見を行い、多くの反響をいただきました。その際、一部登壇者から、「シルバーポリティクス」「シルバー民主主義」という単語が発せられました。また、ウェブサイトの記述の中にも、同様の趣旨の言葉が記されていました。

これらの表現は、分析的な姿勢を装いながら、その実、民主主義をめぐる議論の解像度を下げ、分断に加担する言葉であり、また多くの人を切り捨てる可能性のある言葉でした。この表現について訂正し謝罪するとともに、なぜこのバズワードの使用を控えるようにするのか、その理由を説明いたします。

### ①私たちは世代間の対立や分断を恐れます

シルバー民主主義といった言葉は、リソースの分配をめぐって、ゼロサム（一方の利益が他方の損益になる、利害の総和がゼロになるという考え方）的な対立が世代間で生じているとの語るを前提とします。その時、財源や政策リソースの有限性、という緊縮的な語りの罫にはまりがちです。

この言葉は特に、「高齢者ではなく若者に使え」という語りに用いられます。このように、「声が小さいから大きくしよう」という発想をベースに、「高齢者から削れ」という主張と結び付けると、結局は「声が小さい」状態である高齢者貧困層へのバッシングにも、容易につながります。

例えば生活保護受給世帯が高齢者に多いことを問題視し、「なぜ自分たちが好き放題したやつの面倒をみなくてはいけないのか」とバッシングする言説もあります。こうした声を、「若者の声」とであるという理由だけで肯定していいことにはなりません。

ひとり親家庭にも、「手当を受けているのにスマホを持っている」といった言葉が向けられることがあります。また、困窮学生にも、「困窮家庭の大学生や専門学校生が経済的理由で中退するのは甘え」というような言葉が向けられることがあります。

こうした排除的な言説は、それぞれの生活者の個別風景を不可視化し、「世代」というまとまった数字として扱いつつ、対象を悪魔化することになってしまいます。若い世代にも向けられ、苦しんでいる言葉を、そのまま形を変えてぶつけるわけにはいきません。

最近でもインフルエンサーによる、野宿者排除を助長する表現が問題となりました。単に「若者の声を聞け」だけでは、その質を問うことなく、差別的、排除的、攻撃的な声すらも等価に扱うことになりかねません。それらは、生活困窮者や性的マイノリティの権利を守る活動をしてきたメンバーの理念とも適合しません。

## ②コントロール不能になるバズワード

そもそもシルバーポリティクスというバズワードは、定義があやふやであるため、適切な研究であれば、これを説明変数にすることはしないように思います。その一方で、世代間ルサンチマンを運動の駆動源にすることによって、高齢者貧困バッシングなども刺激されることが懸念されます。それらの反応は望まぬものであり、運動の目的ではないため、回避した上でも、「投票率ギャップ改善」というゴールは目指せるのでしょうか。

今回、投票率の向上を目指す際に強調したいのは、「シルバー民主主義を打倒する」ためではありません。「投票率ギャップ」を改善し、「適切な投票の権利を満たしていない社会環境の改善」を求めるためです。また、闇雲に高い投票率をよしとするものでも、特定の年齢層の意見のみを尊重するものでも、高齢者が適法に参政権を行使することを問題視するものでもありません。

ここでいう「投票率ギャップ」は、世代間の差のみを問題視するものではありません。例えば「投票したい」という望みと、「投票する」という行為の間にもギャップがあります。その差は、本人の「意識の高さ」のみでは説明しきれません。

日々の政治報道や言論環境により、政治的な学習性無気力を得てしまう人もいます。投票所までの物理的な距離や、投票所の時間制限によって、投票したくても難しい人もいるでしょう。だからこそ今後のリサーチでは、投票率を下げる環境要因、例えば「投票所の数の減少」「投票所の時間短縮の流れ」などの問題を整理する予定でし

た。それは、「投票をめぐる環境改善に結びつけること」「小さき声を可視化したうえで、公正な議論を目指すこと」が目的でした。

なお、アンケート項目に、「もっと若者や現役世代に税金を使って欲しい」かを尋ねる項目がありますが、これは人々の関心領域を図るという意味で主催者が設定したのもであり、その予算の捻出方法についての意見表明を行うものではありません。特に、高齢者向けの社会保障を削ったほうがよいという意図を持つものではありません。しかしながら、オープンな場所でのアンケートという形であることと、シルバー民主主義という言葉が結び付けられたことにより、そのような不安をもたらす事もまた事実であり、より適切な文言が選択可能であったと思います。

### ③民主主義は多数決ではない、はずなのに？

シルバー民主主義について議論する際、その数について注目することが起きがちです。それが結果として、少数意見の可視化というスタンスから離れ、「数の勝負」に還元することになりえます。これが、もう一つの問題です。

選挙は投票数で候補者を選ぶものですが、そこで全ての政策が決まるわけではありません。メンバーの多くは、アクティビズムやロビイングを通じて、投票以外の社会的手段を用いて、さまざまな政治課題の改善に取り組んできました。人口比率が変わらずとも、世論や政策は変えられます。「高齢者が多いから、高齢者に有利な結果になる」は、その点を矮小化してしまいます。

最近では例えば、賛否の大きかった消費税導入の議論が、「高齢者からも取れる」というロジックで正当化されていました。医療費負担の上昇、年金受給可能年齢の引き上げなど、高齢者にとって不利になる政策も世の中には多くあります。

若年層は、いずれ高齢者となります。高齢者と若年層という疑似対立によって、分配が削減されれば、結果的に世代を超えて人々の生活の質を下げることにもなります。

### 最後に

今回は複数の方から指摘いただいた懸念について応答するという形になりました。このような指摘は本当にありがたく、ともに対話しながら議論を進められたら嬉しく思います。

今回のアクションは、「応答なき政治」に対抗するという側面があります。疑問に応答しないこと、自分の声を無視することに慣れてしまいそうになる昨今においても、

声は届けられる、対話は続けられるということを示すためのアクションです。今回、プロジェクトに向けられた疑念と、その応答により、さらに、政治環境をめぐる議論が前進すれば。そう願っています

以上